連載寄稿

シンガポール便り2015

東京玉翠会シンガポール支部事務局
本田博之（昭和57卒）

第33回東京玉翠会総会が、本年も例年通り盛大に開催されますことを、遠くシンガポールからお祝い申し上げます。

シンガポール支部ってあったん？

５年前にシンガポール支部を立ち上げた前事務局の三木氏（S60卒）が今年３月に帰国したことに伴って、昨年４月に来星してまだ１年の私が後を引き継ぐことになりました。一時は最大10名の会員数を誇り（写真１：昨年６月に開催された飲み会、じゃなくて支部会の様子）、しかもこの10名中３組が夫婦で、さらに７月に来星した妻（旧姓小瀧、S59卒）の同級生が４名を占める（内１組は夫婦）という凄い（何が？）状況でしたが、次々と帰国し、現在ではシンガポール香川県人会会長でもある小松慎一先輩（S45卒）はじめ、５名だけになってしまいました。もし「俺の同級生もシンガポールにおるでぇ〜」という方がいらっしゃいましたら、私までご連絡頂ければ幸いです。

シンガポールって親日なん？

本で読んだり旅行の際に見聞きしたりして、何となくシンガポールは親日と思っている人も多いと思います。ですが、昨年10月のサッカー「日本対ブラジル」の親善試合（写真２）では、大変珍しい光景を目撃しました。何と、シンガポール人がジャパンブルーのユニホームを着てスタジアムに多数応援に来ているのです。カップルは勿論ペアルックで、小さな子供に着せた親子連れも沢山いました。我々がドイツやアルゼンチンのユニホームを着るのと同じような感覚かもしれませんが、日本のユニホームを着て応援してくれる外国なんて他にあるのかなと考えると、すごく不思議な感じがしました。余談ですが、ワールドカップ予選でシンガポールは日本と同じ組に入ったことから、今年の11月にはシンガポールで「真剣勝負」が行われます。この時はさすがにシンガポール人も日本のユニフォームは着ないんだろうな・・・

Get well soonの願いも空しく・・・

シンガポールが親日国であるのは、建国の父とも言われるリー・クアン・ユー元首相のお陰であることは広く知られていますが、残念ながら今年の３月に亡くなってしまいました。２月に入院してからTVで連日、容態と病院に寄せられる多くの激励メッセージが放送されていましたが、小さな子供たちがリー氏の絵と「Get well soon」と書いた画用紙を長男のリー・シェン・ロン現首相に病院で渡していた姿が印象的です。亡くなってから国葬の日まで、遺体が安置されていた国会議事堂への弔問の列が日ごとに伸びて最高10時間待ちまで達しましたが（写真３）、途中で帰る人はいませんでした。その中には、インド系やマレー系の方も多く見られました。シンガポールは７割以上が中華系の移民国家で、リー氏は華人の中では比較的少ない客家の出身でしたが、あらゆる国民層から慕われていました。国葬の日は、霊柩車が走り出したとたんに土砂降りの雨が降りだして、空も大泣きしているようでした。雨にも関わらず多くの国民が沿道につめかけて、びしょ濡れになりながらリー氏の名前を連呼して最後の別れを告げていました（写真４）。日本の首相が亡くなった時はどうだっただろう・・・と思わず比較せずにはいられない瞬間でした。

1

2

3

4

5

願ったのは国の繁栄、捧げたのは人生

シンガポールは今年８月に建国50周年を迎えますが、残念ながら先の戦争で日本はシンガポールを占領するなど、両国間でとても悲しい出来事がありました。また追悼期間中に放映された過去のインタビューで、「（日本式の）お辞儀を知らなかったことで殴られ踏みつけられた」とリー氏が語っているのをみましたが、この時の体験からも決して最初から日本が好きではなかった、いやむしろ憎んでいたとさえ言えるでしょう。ですが現実主義者のリー氏は、国と国民の未来のために日本との和解の道を選択してくれました。例えそれが、当時マレーシアから追い出されて独立を余儀なくされた「未来のない国」シンガポールにとって、戦後既に経済成長を遂げていた日本の資金力と技術力を必要としていたからだったとしても・・・。もちろん開発独裁とも言われるその強引なやり方や言論の自由の制限には批判があるのも事実ですが、今現在こうして我々が家族共々世界のどの国よりも安心して暮らすことが出来て、かつシンガポールが親日国でいてくれるのも全てリー氏のお陰であり、シンガポール在住日本人としてそれを忘れてはいけないと思っています（写真５）。

最後になりましたが、シンガポールにはうどんの「たも屋」も４軒ありますし（うどん県人の嗅覚で家から５分の所に１軒あります）、オーナーが香川県人で県人会御用達の「和食鉄板焼かがわ」では骨付き鳥も食べられます。遠く異国に来て故郷の食を味わいながら同窓生と昔の話題で盛り上がれるなんて最高の贅沢かも知れませんね。是非シンガポールにお越しの際は東京玉翠会シンガポール支部で歓待致しますので、ご連絡お待ちしています。